

地域情報（県別）

【鳥取】コミュニティにコミットする医師を育てるには-谷口晋一・鳥取大学医学部地域医療学講座教授に聞く◆Vol.2

2020年5月15日 (金)配信 m3.com地域版

鳥取大学医学部地域医療学講座は、地域包括ケア（コミュニティ）にコミットする医師を育てることをミッションの一つとしている。その実現のためにどのような取り組みやサポート、工夫を行っているのか、当講座の初代教授である谷口晋一氏に詳しく話を聞いた。（2020年2月26日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)（近日公開）

——コミュニティにコミットする医師を育てるために、どのような取り組みをしていますか。

鳥取大学の医学生に地域医療の魅力とやりがいを感じてもらうために、個別の面談などに加え、以前は地域枠1～2年生を対象として大山で合宿をしていました。そこで地域医療に携わる現役の医師やOBたちに講演をしてもらい、交流を深める試みを行っていました。ですが「強制的な“やらされ感”があって楽しくない」という意見もあり、止めてしまいました。

今は、地域枠に限らず1～4年生向けに選択肢を増やし、当講座の企画（地域のフィールドワーク、地域医療の抄読会など）や地域医療支援センターが企画する地域活動、県が主催する病院見学などのうち、興味のあることに毎年1回は参加させてモチベーションを上げるという方向に切り替えています。

例えば、日野町の黒坂地区で年に4回行われる「くろさか春夏秋冬セミナー」というものがありまして、これは地区で開催される季節のイベントに学生たち（保健学科やYMCA米子医療福祉専門学校の学生も含む）が役割を持って参加するプログラムです。医療とは直接関係ないのですが、地域の人々の暮らしに接することで地域を知ることが目的としています。

熱心な学生は年に1つだけでなく複数の企画やサークル活動に参加しています。まあ、少数派ですけどね……。地域枠だから地域医療に関心があるということでもないんです。



谷口晋一氏（鳥取大学医学部地域医療学講座 教授）

また、3年生になると1カ月間の研究室配属があり、特別養成枠の学生（5人/年）は地域医療学を選ぶこととなります。彼らに米子市内の高齢者の多い地域の公民館でフレイルのアンケートを実施してもらい、その結果を今年の日本プライマリ・ケア連合学会で発表してもらう予定になっています。また、彼らはキャリアパスが自治医大と同じですので、鳥取出身の自治医大生との交流を深めるイベントなどにも参加してもらっています。

4年生には全員、必修で「地域医療体験」を受けてもらっています。県下に約50カ所ある診療所や病院のうち、少なくとも4カ所を見学します。やはり地域の医療機関に行ってもらおうというのは大きな意義があると思います。また、文化人類学の先生から現場観察の手法（エスノグラフィー）を学んだ上で、目にしたことや考えたことについて

ポートフォリオ（テーマ例：医療現場の「当たり前」を疑う）にまとめてもらい、われわれがウェブ経由で簡単なフィードバックを返しています。

このフィードバックは、学生数も多いので、教員にとってけっこう大変な作業なのですが、なかには非常に面白い着眼点を持ったセンスのいい子たちがいます。そういった子たちは総合診療や家庭医療に対して親和性が高い傾向があり、専門に分化して医局に入ってキャリアを積んでいくことに対して疑問を感じたりしています。そして結果的には総合医や家庭医への方向につながる子たちが出てくるんです。かなり少数派ですけどね。

——5、6年生については、どんな取り組みをしていますか。

5年生は必修で、日野病院の地域医療総合教育研修センターもしくは大山診療所の家庭医療教育ステーションで1週間の臨床実習を行います。大山の方がよりプライマリ・ケアに近い実習ができますが、アクセスが不便なので、日野に行く子が多いですね。6年生は選択で1カ月間、日野病院で研修できる機会があり、これを選択するのは勉強熱心な人、医師としてバランスがとれている優秀な人が多いと感じます。

大学病院では紹介状を持った患者を診察するのですが、日野病院では詳しい病状が分かっていない患者が飛び込みで受診してきます。その外来に学生が前面に出て診察します。もちろん先輩医師が影に隠れてチェックしていますけど（笑）。そういったことは大学病院ではできませんので、学生にとっては非常に新鮮な体験になります。診察の基本をきちんと学んでもらえるのは非常に大きなことだと思います。

また1週間だけですが、入院患者のケアにも携わってサマライズしてもらいます。Significant event analysis (SEA) といって、患者とうまく話ができなかったとか看護師に怒られたなど、その日に起こったことを毎日振り返り、1週間のうちで最も心に刻まれたことについて省察することを義務付けています。そうすることによって、学生は単にその患者の治療過程を見るだけではなく、患者の背景をも考えるような複眼的な考察ができるようになっていきます。このように、学生の実習に家庭医療的な側面を盛り込むことができたと感じます。

とはいえ、これはそんなに簡単なことではなくて、なかなか学生たちはできないですね。生物医学的なことにしか興味がない子もいれば、患者の内面や社会的な側面に興味を持つ子もいて、人それぞれです。4年の地域医療体験でセンスのいいポートフォリオを出していた子は5～6年の学外実習のときもいいコメントをしてもらえることが多く、進路選択時にはどういう医師を目指すべきか真面目に考える子が多いような気がします。

——進路選択に悩む学生にはどのようなことをしていますか。

私が面談することもあります。より年齢の近い先輩たちもサポートしています。この教室にはへき地医療に従事した自治医大出の医師や離島医療の経験がある鳥取大学出の若手医師が集まっており、鳥取大学とは違う文化の中で育ってきた方や家庭医療の実践をしてきた先生方がいますので、ロールモデルとして彼らから助言してもらったりしています。

——家庭医療をより深く学びたいという姿勢の学生に対して特別な取り組みはありますか。

コアに家庭医療に興味がある学生には、英国で家庭医療のクリニックや大学を視察する約1週間のツアーに参加するチャンスがあります。希望する学生には応募理由を作文に書いて提出してもらい、その中から総合診療や家庭診療に将来強くコミットしていく学生を選抜してツアーに連れていきます（今年は新型コロナウイルスの問題で実施できず）。毎年20人ほどの応募があり、5～6人が選ばれます。英国のクリニックの現場は日本の開業医のそれとはかなり違いますから、良い面・悪い面を含めて日本のシステムと比較することができ、学生にとっては非常に貴重な体験になっています。

◆谷口 晋一（たにくち・しんいち）氏

1985年に鳥取大学医学部を卒業し、同大の第一内科（現・病態情報内科学）へ入局、内分泌代謝分野を専攻。1994～1996年に米国国立衛生研究所へ留学し、帰国して2005年から地域フィールド調査「鳥取-江府study」と江尾診療所での生活指導介入を開始する。2010年3月より鳥取大学医学部病態情報内科学准教授となり、同年10月に鳥取大学医学部地域医療学講座教授を併任し、現在に至る。

【取材・撮影・編集＝伝わるメディカル 田中留奈、文＝林文乃】

